

学協会の今

——社会と向き合う ①

今月号から新たに設けた「学協会のコーナー」の連載企画として、「学協会の今——社会と向き合う」をお送りします。

現在、学協会が社会と向き合っているか、あるいは、組織・運営の問題も含めてどのような懸案や課題を抱えているか等について、今後、各学術分野の学協会に順次寄稿していただき、この連載シリーズを学協会問題に関する議論と情報共有の場に育てていきたいと考えています。各学協会のご寄稿をよろしくお願いいたします。

なお、紙幅の関係上、寄稿された学協会には、現在、取り組んでいる課題、懸案等に絞ってご執筆いただきました。学会の「概要」（設立趣旨、沿革、会員数、刊行物等）については、『学会名鑑』Web版*をご覧ください。

*日本学術会議、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）及び公益財団法人日本学術協力財団が連携・運用する学協会データベース。URL: <https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/>

日本語バリアフリー

——一般社団法人日本生態学会の試み

生態学は個体以上の階層を主な研究対象としたマクロ系生物学の一分野である。個体以上の階層とは何か判然としない向きは、生態系や動物の「社会」などを想像されたい。本学会は現在会員数が4000人を超えるマクロ系生物学における国内最大規模の学会である。生物多様性保全や気候変動対応などの環境問題にも密接に関わる分野であり、年次大会には環境NPOやアセス関係者などのアカデミア外の市民が多数参加するのも特徴である。

このように社会との繋がりが深いゆえの問題を本学会は抱えていた。日本語使用を重視する社会向けの機能と、研究者の国際情報発信力のあいだのトレードオフである。戦後日本の生態学では欧米の研究情勢をいち早く紹介する日本語教科書が出版されてきたが、その伝統は今も

PROFILE

辻 和希 (つじ かずき)

- 日本学術会議連携会員
- 行動生物学分科会委員長
- 日本生態学会理事
- 将来計画専門委員長
- 琉球大学教授

専門 進化生態学、動物行動学



続いている。日本語テキストの充実は、先端的内容を母国語で熟論できる環境を醸成し次世代研究者育成にも貢献した。その結果、世界の標準的教科書にも引用される古典研究も生まれた。1990年代には大学院博士課程に在籍する若手研究者ならば、英文論文を海外の著名誌に発表することはほぼ常態化していた。しかしながら、引用数などで見る研究成果のインパクトは欧米諸国のそれに比すると改善の余地があるのは明らかだった。背景には日本のアカデミア全体に共通する問題があると思われた。それはプラスアルファの情報発信力である。日本の研究者は母国語で練った高度な内容を英語で論文化

するまではできても、国際学会や国際共同研究プロジェクトなどの場面では、議論を英語で行う経験の乏しさから寡黙になってしまうのである。少なくとも、先端研究を担う次世代研究者はスキルとしての英語力を向上させ、情報発信力のハンディを払拭すべきである。若手の海外長期留学は有効策だが、学会ができる打開策として、国内で英語発表を経験する機会と機運を高めることが有意義であると思われた。

そこで議論と試行錯誤を経て、社会に開かれた学会としての機能を損なわずに、志のある若手研究者に英語での科学コミュニケーション機会を与えるため、大会企画委員会内に英語発表部会を立ち上げるとともに、2014年の広島大会から英語口頭発表賞を設置した。博士取得5年以内というキャリア制限を設けた初学者・若手向けの賞である。賞の位置付けは、英語の流暢さを競うコンテストではなく、発表内容の学術的価値と、科学コミュニケーションの技能と姿勢（必ずしも全員が英語を母国語としない聴衆の前で、英語で伝えることができたか、あるいは伝えようとする意思が感じられたか）を評価することとした。上記ポリシーは審査員の負担軽減にも繋がった。英語が母国語でない聴衆として審査員も「理解可能な面白い発表」を高く評価すれば良いからだ。担当する座長には、終始笑顔で司会し、講演者が質疑応答で窮したときには、「座長が通訳するので、日本語で応答してよい」「聴衆によるヘルプも歓迎する」などと述べ、和気あいあいとした空気に会場を包むようお願いした。これは「英語の口頭発表は一部の優秀な若手だけがする苦行」というありがちな先入観を払拭し、発表のメンタルな敷居を下げるためであった。

英語口頭発表賞のもうひとつの重要な意義

は、留学生や近隣諸国の研究者に年次大会に参加するインセンティブを与えることであった。隣国との学術交流は、Future Earthなど国際研究プロジェクトの推進にも必須である。本学会はアジアでも分野最大規模の学会であり、年次大会が近隣諸国間交流のハブとして機能してもよいはずである。しかし、それまでの大会では、外国人研究者を招聘したシンポは毎年企画されていたものの、発表の95%程度が日本語オンリーであり、プログラムから要旨までほぼすべてが日本語であった。アンケートからも留学生や海外の研究者にとって魅力のない大会であるのが見てとれた。そこで近隣諸国の大学で教鞭をとる学会員に英語発表部会の委員に就任してもらい、指導生や若手研究者に英語口頭発表賞への応募を推奨していただいた。結果、台湾や韓国からの応募は毎年コンスタントに実現している（生態学会は国外研究ポストに就くためのフォーラムも実施している）。賞により英語発表が増えたことで、発表せず聴衆として参加する非日本語話者にとっても大会の魅力が増した。予想外の副次効果としては、英語口頭発表賞のセッションに多くの聴衆が詰めかけたことだった。それは受賞を目指した高質な講演、すなわち「自信作」が集まったからだ。大会では10会場で行われていた講演が行われるが、その中でも英語口頭発表賞のセッションは大入りで、今では部屋から聴衆が溢れ出ることもある。

日本語で熟論ができる環境を堅持しながら、エスペラント・コミュニケーションツールとしての英語の使用を推進するという目標を、日本生態学会では日本語バリアフリーと呼んでいる。その精神が日本のアカデミアに浸透すれば、この事業を進めて来た私にとっても本懐である。